

平成30年4月1日発行 春燈/第73巻第4号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 April

4月号



主宰の句

安立公彦

この青きみ空よ永久に初詣

広辞苑七版書架に春を待つ

つつましき紅の香や冬薔薇

ふくら雀暫し己の影とあり

臘梅に風穏やかな夕べかな



成瀬櫻桃子の句

大江山鬼の育てし月夜昔

「素心以後」(昭和六十年〜平成七年)

先生の句は大変多方面にわたり、造詣が深くていらっしやる。なかでも、メルヘンの世界の句は、またすばらしい。それが、単なるメルヘンの世界ではなく、そこに大変深いものが流れていると思われる。

例えば、この鬼は先生で月夜昔は美菜子さんではないでしょうか。私はふとそんなふうに思われてなりませんでしたがいかがでしょうか。

府川 昭子

成瀬櫻桃子の句

春障子もの音昼を深めけり

『素心』昭和五十三年

櫻桃子先生五十三歳の作品。

春障子を通して柔らかな日差しが、座敷を明るくしている。耳を澄ませば小鳥の声なども聞こえてくる。池の鯉も跳ねたであろうか。穏やかな春の昼の景を聴覚の感性で詠いあげた。のどかな春昼の気配が濃厚だ。

師、円熟の境地での安らぎの一句。簡明な措辞で余情を究める万太郎、敦の句柄を十分継承されている。

小島昭夫

燈下集

○ 小張 昭一

大発会の株の行方や飛行機雲
福引やいつも当てる子連れてゆく
街中に餌漁る猪や初閻魔
人形町芸者新道初観音
加湿器の水足す居間や寒明忌

○ 鈴木 鳳来

年酒酌む喜怒哀楽の昭和かな
寒すずめ七転八起を演じけり
赤い実に鳥の来てゐる寒日和
山国の月の育てる氷柱かな
春隣人形芝居のメール来る

○ 松本 峰春

水道の水も若水禱りけり
若水汲み序でに祝ふわが傘寿
アノラックの赤着て傘寿夢棄てず
遠回りも寄り道もせず寒句会
ことのほか揺れてどの灯も春待つ灯



○ 鷹崎 由未子

鳥声の高く過るや初御空（祝・『早春』）
今日よりの先は神意や初茜
祝ごとのつづくまゆ玉大ぶりに
初泣や男の子のしるししかとあり
奈良筆のまだ墨知らぬ淑気かな

竹馬や日月遠き昼の月

寒鯉の吹くごとく泡吐きぬ

不問とす猫の捕へし嫁が君

初東風や南大門の仁王尊

笹鳴やゆつくり巡る尼五山

○ 木村傘休

風を呼ぶ八手の花はつめたき香

ゆく年の更けて狸と出会ひけり

初空へ耳を大きくひらきけり

梅の木に暗き洞あり寒の入

人日や沢庵漬ですすむ食

○ 鈴木直充

『早春』を仰ぎ今年の一步かな

干支の戌折りて目鼻や明の春

ペン先に届く光や春立てり

紐ときし形見の茶碗利休の忌

ラフカディオ・ハーンの日本蠱屑や蜆汁

○ 加藤良子

独り居の夜風やはらぐ玉子酒

着ぶくれて抗ふことを遠くせり

故里は雪舞ふ頃や湯の滾る

故里や蔵に反りたる寒の餅

電話機をこりと置くや冴返る

○ 高橋和女

鳥影の一閃年の立ちにけり

新婚の暮しを語る賀客かな

草石蚕の出自に話はずみけり

雪折の松の香りや奥の院

水琴窟春立つ音を奏でをり

○ 鈴木静恵

初明り湖心にしかと逆さ富士

初夢や弾けぬピアノを弾きまくり

初雪や屋台に別れ難く酌む

手秤で値踏みしてをり寒卯

歳時記に栞のあまた春隣

○ 柴崎甲武信

○ 近藤 牧男

御降のほのと香の立つほどにかな
だしぬけに鴉の御慶もらひけり
初富士の遠くなるほど光りけり
飾取る夕べは少し風の出で
雪降り来しづかに箸を置きにけり

○ 吉澤 恵美子

新春の眩しき光射しにけり (祝・立春)
しんしんと雪降るばかり皆無口
足跡を置いてゆきたる雪女
雪の蔵王裏も表もなかりけり
地酒酌む雪焼著き出羽の人

○ ト部 黎子

駅伝のドラマの襷冬日継ぐ
住み馴れし町も老いゆく烏総松
人日やレンジ頼りの独りの餉
寒九の水しやきつと老軀目覚めさす
冬木の芽ゆるやかに時充電す

○ 卯木 莨子

安堵の堵度忘れしたる初日記
雪しまく和風を纏ふ庭の木々
ピアノストよろしく猫は蒲団揉む
白鳥の気品ありたる苛めかな
扉無き転た寝に入る老いの春

○ 深川 敏子

転院の寒紅うすくさしにけり
凍鶴の寂しき時は丸くして
竹馬や父母の恩重かりき
藪人の昔やありし日の六区
浅草に節分の豆買ひにけり

○ 大室 恵美子

装ひて仕上げは笑顔初鏡
晩節の身仕舞しやんと寒椿
寒の水吞みて己を恃みけり
風花や仏心目覚む永平寺
冬の灯を消すや海鳴りなほ強し

余言

安立公彦

詠初やわれらに残る文語脈

中村嵐楓子

現代俳句は時代と共に多様化して来た。口語調の混用も見られる。「春燈」は創刊以来文語体を表現の基本として来た。十七文字という俳句固有の詩型に於て、口語体では表現し得ない微妙な感性も文語体により感得され得る例もある。三百年前の俳句に違和を感じないのも同様である。

この句、「われらに残る文語脈」が、そのことを控え目ながら確と詠い上げている。作者は舞台演出家。『久保田万太郎…その戯曲、俳句、小説』という近著もある。

脱ぎてなほ人のふくらみ裘

青柳 雅子

「裘」は、かわごろも、毛皮で作った防寒用の衣服。歳時記にも「毛衣」の見出しで掲載されている。その解説にはこう記してある。「寒冷地の獵師や炭焼きは、動物の毛皮で作った腰当や袖無を身につけていた」。この一文を読むと、「またぎ」と呼ばれる狩人を思い出す。

人里離れた山家。猟から帰って来たまたぎは着ていた毛衣を脱ぐ。その毛衣は衣類と違って厚みがある。「人のふくらみ」その物の毛衣が、生ある物の如く詠まれている。

幸せの降るかに青し初御空

岩永はるみ

今年の新年大会で特々選に戴いた句。正しく新年の句である。「初御空」が生きている。「幸せの降るかに青し」が、「初御空」のめでたさを具体的に表現している。

作者は今元旦の空を仰いでいる。明けたばかりの初御空はくつきりと青い。その神々しさは、同時に今年の仕合せをもたらすかのように青く澄んでいる。歳時記によつては「初空」を主題としているものもあるが、「初御空」とあつて初めて淑気も身に添うものである。

人日の美祿六腑に染みにけり

林 紀夫

○歳時記を読んでいると、正月のひと日ごとにそれぞれの故事が記載され、今更のようにわが国の伝統の深さを味わう。この「美祿」は酒の異称、「六腑」は漢方で謂う六種の内臓、即ち、大腸、小腸、胆、胃、膀胱。正月七日は七種の日である。七種粥の並ぶ卓を前に酌む酒。酒は天の美祿と漢書にある通り、六腑に染みるその味はまさ

に美酒である。人曰、美禄、六腑」と漢字が並ぶが、理屈に走らない爽やかな正月詠である。

歩まねば寂ぶる足かも枯葉踏む

長谷川歌子

「寂ぶる」は即ち活気を失うの意。「歩まねば寂ぶる足かも」は全くその通りと思う。テレビなどでも、歩くことの大切さを繰返し放映している。私も夕暮れ近く出来る限り歩くことにしている。それも速歩を心掛けている。

作者の年齢は知らないが、世に後期高齢者という基準が設けられている。人生七十古来稀なり（杜甫）の頃の世はさぞかし高齢者は敬愛されていたことだろう。今、枯葉を踏みつつ林間を歩く作者、「その姿勢や好し」です。

初鏡茶寿まで粘る面構へ

廖 運藩

世に「賀」の祝いは幾つまであるか、七十歳の「古稀」の上は七十七歳の「喜寿」、八十歳の「傘寿」、八十八歳の「米寿」、九十歳の「卒寿」、九十九歳の「白寿」、百歳の「上寿」、まだある。百八歳を「茶寿」と謂う。作者は今年に当り、「初鏡」の前に立つ。姿見に写る自分の顔には、まだまだ老衰など寄せつけない壮健な顔が写っている。「面構へ」そのものの顔だ。そこには茶寿まで粘るの面立ちがある。前向きな姿勢に感服あるのみだ。

忘却と言ふ良葉や帰り花

呂 秀文

「忘却と言ふ良葉」は言い得て妙だ。それが「や」の切字を付けて「帰り花」に続く表現の善きとなっている。上五中七の大事な意味を、ひととき棚上げしているような表現だ。しかし人世時にはこういうことが処世の正しい在り方となる事態もあり得る。

作者の国籍は台湾。目下誌上には台湾の俳人が六名出句されている。しかし一句に宿る人情味は些かも変わることはない。その人情を交歓する場が、月々の春燈誌である。

読初は人間臨終図巻その二

上野 進

『人間臨終図巻（新装版）』は、以前「五風十雨日録」で取り上げたことがあったが、平成二十三年、全四冊の文庫本として徳間書店から出版された。「その二」には、五十歳から六十四歳までの享年の人を収録。芭蕉、西郷、赤彦、シエクスピア、孔明、ダンテ、杜甫、李白、朔太郎、白秋、鵬外、一茶、他三四名の故人が収録されている。

この句、季語の他は書名のみ。万太郎師に、露伴全集を詠んだ句があった。この図巻は故人への形式的な追悼文ではない。死に瀕する著名人の文であり、伝記の最終部を為す短編小説である。一読の価値がある。

当月集

安立 公彦選



○ 大森道生

寒月の水面に揺るる露天風呂

過去捨てて軽くなりたる古曆

雪化粧凍ゆる華の金閣寺

天界の落人村や梅三分

梅三分ほのと色づく吉野山

○ 平沢恵子

新春の机上に清し師の句集（祝・言春）

集ふ子の背丈それぞれ今朝の春

女正月プリンゆらせる笑ひかな

焼きたてのせんべいの香や初天神

心字池昼の氷に鎮もれり

○ 持田信子

大寒のひかりあつむる江戸切子（亀戸天神五句）

「通りゃんせ」路地ぬけて行く初天神

鸞替の清めの太鼓ひとつ打つ

小槌振る大黒舞や里神楽

筆塚は大硯なり梅ふふむ

○ 川崎雅子

寒満月満潮堤を越えむとす

嫁が君独りの宿をおびやかす

臘梅の盛りや癒しの黄となりぬ

福も鬼も共に来れよ節分会

米寿とや越ゆる山坂霜の果

○ 坂本依誌子

東京の大雪母の忌なりけり

関東に血縁増ゆる春近し

まだ堅き数多の風の椿かな

釜の湯のゆるゆる煮ゆる春炉かな

校庭のこゑ朗らかや木々芽吹く

春燈の句

安立 公彦選

道の辺の一木一草淑氣満つ

兵庫 向井 芳子

初風や内海に船ひとつなし

一言居士一席ぶつて年の酒

熱々の御飯に落とす寒卵

卓の上を増ゆる一膳お元日(弟結婚)

東京 近藤 真啓

国訛抜けぬ生徒の御慶かな

熱の夜の両手に抱く根深汁

あかがねの月や寒柝うち来る(雀籠月蝕)

掘炬燵心のうちを聞かさるる
兵庫 秋山 薫

鉛筆の芯尖らすや風凍つる

凍つる夜や両手であくる一枚戸

待春や外出用の靴みがき

波音のひときは高き初日の出

初出で湯伊豆の山やま目交に

千葉 山浦 紀子



教へ子の伸びやかな文字賀状かな

ネイリストの柔らかな指春を待つ

元日草やはらかき日にほぐれけり

注連飾る軒に朝日のかかりけり

緋袴の巫女は教へ子破魔矢受く

御降や音滴らす鎖樋

夕爾眠る地鳴き声喜々とみそさざい

風花を音符と舞へるカブリツチオ

大らかな旋回春呼ぶ鶯の笛

芽吹き初むる木々や我にも若さ欲し

枯菊をあはれあはれと焚きぬたり

あるがままの心も映し初鏡

水仙の香のしづかさや寺座敷

穏やかな暮しを守る雪伊吹

東京 佐俣まさを

広島 浅田セツ子

岐阜 種田 利子